

2011年度「未成年者飲酒予防基金」活動報告

東京大学 環境安全研究センター 割間 理介
「日米独3カ国における未成年者の飲酒に対する意識の比較調査」

研究目的

本研究は、日本、米国、ドイツの3カ国のうち横浜、ニューヨーク、ミュンヘンに在住する高校生と30歳代～40歳代の配偶者と子供がいる成人を対象に、メール配信によるWeb形式のアンケート調査を行い、飲酒に対する意識、飲酒行動の実態を調査し、各都市における成人と高校生の飲酒に対する意識・行動の各都市間の相違を検討することを通して飲酒に対する意識や飲酒習慣など社会文化的な相違が未成年者の飲酒に対する意識や行動に与える影響に関する知見を提示することを目的とした。

研究方法

調査対象は日本、米国、ドイツの3カ国のうち横浜、ニューヨーク、ミュンヘンに在住する高校生それぞれ200人（男性100人、女性100人）と30歳～49歳の配偶者と子供がいる成人それぞれ200人（男性100人、女性100人）の各400人（3カ国で1200人）であり、メール配信によるWeb形式のアンケート調査を行なった。3カ国におけるアンケート調査の実施はTransbird株式会社（東京都港区）に委託した。

アンケートは、成人と高校生とともにまる1)飲酒の有無、2)高校生が飲酒することへの意見・認識、3)未成年の飲酒によりアルコール依存症、脳機能障害、生殖機能障害などのリスクが高まることの認識の程度等について質問した。さらに飲酒をしている成人と高校生には4)飲酒の頻度、5)誰と（または1人で）飲酒をするのか等について質問した。得られた回答は、分散分析、相關分析、Fisherの正確確立法による度数の差の分析等の統計的処理を行い、結果を検討した。

結果

1) 各都市の高校生の飲酒率と飲酒頻度

上記の3都市の高校生回答者の飲酒率と1ヶ月に1回以上飲酒している高校生の割合を表1に示した。横浜の高校生の飲酒率は14.5%で、男女ともに飲酒率は10%台であり、他の都市に比べ著明に高校生の飲酒者が少なかった。ミュンヘンでは男子は90%以上、女子は80%以上が飲酒をしていた。これはドイツの法令で16歳以上はワインやビールなどの発酵酒に限り飲酒を認めている事が大きく影響していると考える。

一方、アメリカでは21歳以上でないと飲酒を認めていないが、ニューヨークの高校生の飲酒率は43.5%であり、男子が64%、女子が23%飲酒していた。

表1. 各都市の高校生の飲酒率

	飲酒率	1ヶ月に1日以上飲酒している高校生の割合
横浜	14.5% **	3.0% **
ニューヨーク	43.5% **	17.5% **
ミュンヘン	88.0%	68.5%

** P < 0.01 N=各都市 200人

2) 各都市の成人の飲酒率と飲酒頻度

各都市の成人回答者の飲酒率と飲酒をしていない人の概要を表2に示した。高校生の飲酒率と同様に、横浜の成人の飲酒率が最も低く、ミュンヘンの成人の飲酒率が最

表2. 各都市における成人の飲酒率および飲酒しない人の割合

	飲酒率	1週間に複数日以上飲酒している人の割合	過去に飲酒していたが現在は飲酒していない人の割合	過去に飲酒経験がなく現在も飲酒していない人の割合
横浜	63.5%	45.5%	29.0%	8.5%
ニューヨーク	71.0% **	36.5%	23.0% **	6.0%
ミュンヘン	84.0% —	38.5%	10.5% —	5.5%

N=各都市 200人 * P<0.05 ** P<0.01

も高かった。しかし、統計的有意差は認めなかつたが、1週間に複数回以上飲酒している人の割合は横浜が最も高かった。

3) 各都市の成人における高校生が飲酒することへの意識

各都市の成人へのアンケートにおける「高校生が飲酒することについてどの様に感じるか」という質問への回答結果（複数回答可とした）を図5に示した。

各都市においても「どんな場合でも高校生は飲酒するべきではない」という質問への同意率が全ての質問の中で最も高かった。しかし、横浜とニューヨークのこの質問への同意率がいずれも60%台であったのに対し、ミュンヘンの成人のこの質問への同

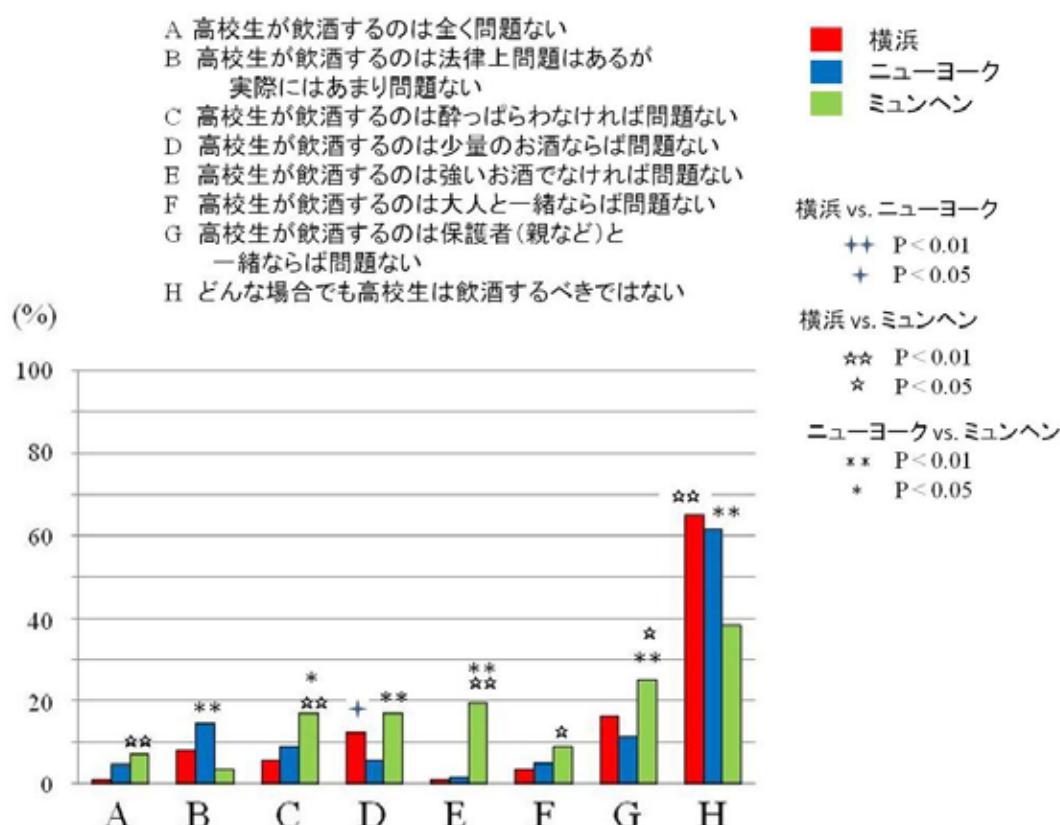


図1. 各都市の成人における高校生の飲酒に対する意識

意率は 38.5% と最も低く、横浜とニューヨークと比較して有意に低かった ($P<0.01$)。逆に、他の都市に比べミュンヘンの成人で同意率が高かった質問には「酔っぱらわなければ問題ない」、「少量のお酒ならば問題ない」、「強いお酒でなければ問題ない」および「保護者（親など）と一緒にならば問題ない」が挙げられ、いずれも 20% 前後の同意率を認めた。特に「強いお酒でなければ問題ない」問う質問への同意率が横浜とニューヨークの成人では 1% 台であったのに対しミュンヘンの成人では 19.5% と有意に高かった ($P<0.01$)。また、ミュンヘンの成人では「高校生が飲酒するのは全く問題ない」という質問への同意率が 7.0% で横浜の成人の同意率 1.0% に対して有意に高かった ($P<0.01$)。ニューヨークの成人では「法律上は問題があるが実際にはあまり問題ない」という質問への同意率が 14.5% と他の 2 都市では 5% 未満であったのに対し高かったのが特徴的であった。

アンケートでのこの質問項目の内容を、「高校生はどんな場合でもお酒を飲むべきではない」を 0 点、「保護者（親など）と一緒にならあまり問題はない」を 1 点、「強い酒でなければあまり問題はない」および「高校生がお酒を飲むのは少しだけならあまり問題はない」を 2 点、「高校生がお酒を飲むのは大人と一緒にならあまり問題はない」および「高校生がお酒を飲むのは酔い過ぎなければあまり問題はない」を 3 点、「高校生がお酒を飲むのは法律上の問題はあるが実際にはあまり問題はない」を 4 点、「高校生がお酒を飲むのは全く問題ない」を 5 点と得点配分し、回答者が上記の項目で同意した事項のうち最も高い得点を採用し、1 つの集団での得点の平均値を高校生飲酒許容指数 (High School Student Alcohol Taking Tolerance Index : HSSATTI)とした。各都市における成人の高校生飲酒許容指数 (HSSATTI) の平均値を表 3 に示した。横浜の成人では HSSATTI の平均値は 0.89 と最も低く、高校生の飲酒への許容度が低い（高校生の飲酒を許容しない）傾向が示された。ミュンヘンの成人の HSSATTI の平均値は 1.59 と最も高く、横浜とニューヨークとの間に危険率 1% 未満の有意差を認めた。さらに各都市の高校生の飲酒率と成人の HSSATTI の平均値の間には Pearson の相関係数検定において $r=0.997$ ($P=0.047$) であり統計的有意な相関関係 ($P<0.05$) が認められた。

表3. 各都市の成人における高校生飲酒許容指数

** $P<0.01$

	高校生飲酒許容指数
横浜	0.89±1.41
ニューヨーク	1.12±1.69 **
ミュンヘン	1.59±1.56